

雨よけきゅうり(半促成含む)定植前後の管理

令和7年4月9日

J Aふくしま未来伊達地区本部／伊達農業普及所



1ヶ月予報（仙台管区气象台 令和7年4月3日発表）

天候：天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

気温：暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高く、特に期間のはじめはかなり高くなる見込みです。

降水量：ほぼ平年並の見込み。日照時間：平年並か少ない見込み



管理のポイント ～根の活着で生育・収量が決まる！～

- 1 購入苗はポットへのかん水をしっかりと行う。
- 2 ベッド内の水分と地温を確保して定植する。
- 3 定植後、主枝摘心までは株元の土が乾かないようにかん水する。
- 4 昼と夜の温度差が大きいので、換気管理に注意する。

1 ほ場の準備

- ①苗が届く前に、アブラムシ類やアザミウマ類の防除のため、ほ場周辺の除草をする。
- ②冬期間屋根ビニールを展張し、何も作付けしていなかったハウス内で土壌が乾燥している場合は、全面にかん水して土壌水分を均一にしておく。
- ③施肥や、石灰などの土壌改良資材の散布は定植の1か月前から2週間前までに行う。
- ④マルチ内の土壌水分と地温（18℃以上）を確保するため、遅くとも定植1週間前までにはマルチを張る。

2 苗の管理

- ①購入苗が届いたら箱から出し、葉が重ならない程度に間隔をあけて並べ、温度・水分に注意しながら3～5日程度環境にならしておく。
- ②かん水には、くみ置きするなどして温めた水を使用する。
- ③草勢が弱い場合は薄い液肥（トミー液肥500倍液など）を、根鉢が回っていない場合は発根促進剤（チャンス液など）を与える。
- ④アブラムシ類やアザミウマ類防除のため、殺虫剤処理を徹底する（最新のJ A野菜病害虫防除基準を参照）。

3 定植

- ①定植は、晴れた暖かい日の午前中に行う。定植日の夜温は、極端に低下することのないように保温に努める。
- ②地温確保のため植え穴は当日開けるのが望ましいが、前日に開ける場合は乾燥防止のため植え穴にかん水をしておく。
- ③定植前に苗を液肥にどぶ漬けし、ポット土に水分がある状態で定植する。
- ④接ぎ木苗は自根発生防止のため、鉢土が畝よりも1cm程度高くなるように定植する。植え穴が深過ぎる場合は土を少し戻して苗を入れる。ポット土と畑の土にすき間ができないように注意する。
- ⑤定植後は速やかに株元手かん水を行い、ポット土と圃場の土をなじませる。使用する水はくみ置きするなどして水温を上げておく。

4 活着期の管理

- ① 定植から1週間程度（活着するまで）は、くみ置きして温めた水で株元手かん水を行う。
特に根鉢が乾きやすいので鉢周りを乾燥させないようにするとともに、ベットの肩にもかん水して畝全体の水分を確保する。
- ② 定植後1週間は、活着を促進するため、ハウス内はやや高めの温度で多湿状態に保つ。夜温15℃、日中30℃（曇天、雨天時は18～20℃）、湿度80%を目安とする。
- ③ 通路散水を行い、空中湿度の確保に努める。

◎活着期の生育診断



- ・ 展開葉が日中でも萎れない。
- ・ 定植時に展開していた葉が大きくなり、葉色が濃く、光沢が出てきた。
- ・ 茎が太くなりつつあり、特に成長点の茎が太い。
- ・ 力強い巻きひげ（緑色で基部から先端まで太い）が出てきている。

以上の場合は草勢良好。

⇒草勢が弱い場合：畝全体の水分確保、ポット土とほ場の土のなじみを確認。
株元かん水、アミノ酸入り液肥や発根促進剤の施用。

5 活着後の管理

（1）温度管理

- ① 急な換気（湿度低下）による心やけや葉やけに注意する。

午前中	25～30℃	暑くなりそうなときは、湿度確保のためサイド、カーテンの順に開けて温度を調整する。 29℃になったら換気する。
午後	23～25℃	23℃になったら、サイドを閉める。 20℃でカーテンも閉める。
夕方	14～17℃	夕方、冷え込む日は、早めにカーテンを閉めるなどして気温を確保する。
夜間	12℃	

- ② ハウス内が高温になる前の換気開始を心がける。ハウス内が高温になってしまった場合は、まず通路散水や葉への軽い散水を行って湿度を高め、きゅうりに直接風が当たらないように風下側から少しだけ換気を始め、徐々に開放幅を広げる。

（2）着果節位

- ① 主枝着果位置と側枝発生は、『節数でなく、ベッドからの高さ』で決める。
- ② ベッドからの高さ40cmまでの雌花は早めに除去する。
- ③ 主枝の第1果は、ベッドから40cm以上（概ね8節以上）で、茎が太く節間がずっと10～12cm程度に伸びてきたところで、着果させる。ただし、生育が良くない時には着果節位を2～3節あげて草勢を確保する。

（3）整枝・誘引

- ① 本葉10～12枚頃に、ベッドからの高さ約30～40cmまでの側枝を2回に分けて除去する。
- ② 主枝10節頃の側枝を1本残し力枝とし、草勢を維持する。
- ③ 力枝以外の側枝は、1～2節止めを基本とする。側枝の摘心は葉が手のひら大になってから行い、常に健全な生長点を3本以上残すようにする。
- ④ 側枝の生長点が極端に小さかったり、節間が詰まっている場合は摘心せずに放任する。

(4) つる上げ時の注意点

- ①つる上げは、本葉10枚頃を目安に行う。つる上げ1～2日前からトンネルを開けて、ハウス内の環境に徐々に馴らしておく。トンネル内の湿度とハウス内の湿度を同じ程度にしておくことが重要。
- ②つる上げは温度が上昇してから行う。つるが折れやすいので早朝は行わない。
- ③つる上げ後、草勢維持のため薄い液肥をかん水する。

(5) 摘葉

- ①本葉18～20枚の主枝摘心頃になったら、下葉5枚程度を2回に分けて除去し、通風を良くする。
- ②大葉、節間がつまっている等で過繁茂の場合は、中段の葉も遅れないように除去する。

(6) かん水

- ①主枝摘心までは株元が極端に乾かないようにする。
- ②気温が上がってくると、葉面からの水分の蒸散が活発に行われ、吸水量が急激に増加するため、少量多回数のかん水を心がけ、晴天時の午前中は積極的にかん水する。
- ③雌花の開花数の増加とともにかん水量を増やす。水不足は果形が乱れるとともに、草勢低下につながる。
- ④収穫開始頃には、1日1株あたり1.5～2リットルの水が吸収される。吸水量は朝夕少なく、日中多くなるので、日中のかん水量を多くする。

(7) 追肥

- ①1回目の追肥は、主枝の雌花の開花～肥大初め頃から窒素成分で0.5kg/10a程度から始め、草勢に応じて追肥量を多くする。
- ②草勢が弱い場合は、開花前から薄い液肥や発根促進剤を株元に施用する。
- ③本格的な追肥は子づるの果実肥大期頃から、窒素成分で0.5～1kg/10aを5～10日間隔で施用する。
- ④収穫開始以降は、収穫量に合わせて施肥間隔を調整する。約500kg/10a収穫ごとに窒素成分で2～3kg/10a施用する。

◎主枝摘心までの草勢診断

- ・開花位置は、生長点から6節前後で咲くのが適正な草勢。
生長点から遠い位置で咲いているときは、草勢強く、良好な状態。



- ・芯の伸びが悪く生長点の近くで開花している。
- ・花が上向きに開花していない。
- ・開花した花の花弁や幼果が小さく色もうすい。
- ・生長点が小さい。

青枠の場合は**草勢が弱い**⇒果形の悪い果実は小さいうちに摘果。

連続着果を避ける。

摘心を遅らせ、生長点を確保。

アミノ酸や微量元素を含む液肥、発根促進剤を灌注または葉面散布。

6 病害虫対策（最新のJA野菜病害虫防除基準を参照）

（１）アザミウマ類、アブラムシ類の発生が確認されています。

- ①ハウス内への飛び込みを防止するために、定植前にハウス周辺の除草を徹底する。
- ②育苗後半から薬剤処理を行い、防除を徹底する。
- ③ウィルス病の対策のため、定植後も本葉１０枚程度まで定期的に薬剤散布を行う。

（２）きゅうり後作にしゅんぎくを栽培する場合は、使用農薬に注意。

以下の表にある薬剤を使用した場合は、しゅんぎくの作付けはしないでください。

- ・ネマトリンエース粒剤
- ・ネマキック粒剤
- ・ネマキック液剤
- ・バイデートL粒剤
- ・その他土壌処理系の除草剤

※農薬名は、令和７年４月１日現在の農薬登録内容に基づき記載。

普及所からのお知らせ

暑さに慣れていない時期です。
適宜、休憩と水分補給をして、熱中症対策をしましょう。



農業事故が増える時期です。
作業前の点検をしっかりと行い、農作業安全に努めましょう。

農薬は、最新の農薬登録情報を確認して使用しましょう。
使用したときは速やかに記帳しましょう。



地域計画や農地中間管理事業の活用等により、地域農業を守りましょう。
収入保険制度・農業共済制度等を活用し、経営の安定を図りましょう。